

## 老碁の楽しみ (63・11・17)

森口 英知 (昭14理甲)

毎月三高の方々の御話を聞かせて頂くのを楽しみにしておりますが、その内容は、殆んどが、御自身の御専門についての解説であり、最高レベルのものであります。

それに反しまして、私の碁は弱いアマにしか過ぎず、皆様の前で碁の話を見せて頂くのは大へんおこがましい次第でございます。

### (1) はじめに

三高を卒業してから約五〇年、京都を離れて暮してきましたが、最近すべての仕事から解放されて京都へ帰って参りました。こういう境遇になりますと、これからの老後をどのように過ごさか、さらに一步進んで、どのように楽しく充実した日々を過ごせるかということが、切実なテーマとなりました。

結論を申しますと、現在の私は大変幸せな日々を送っています。その理由は次の三つに要約できそうです。

第一は、三高という日本一の素晴らしい学校を卒業し、週に何回か三高会館で碁を打ったり、先輩後輩の方々と語り合い、時には、帰りがけに近くで一パイやりながら話しの続きをやり直します。

第二は、山紫水明の京都の四季の中で暮せることです。長い他郷での生活から、京都へ帰って来ますと、改めて京都の良さを痛感する日々です。

第三は、碁を趣味としていることです。現在の私にとって碁は、老妻と同じく、人生の欠かせない伴侶です。

三高の碁の京都の同好会である四明会、また、その分家のKP会へ合計月四回の参加を中心に、碁友たちとの対局を楽しむ以外に、日本郵便碁愛好会という会に所属して、葉書で全国の同好者と紙上対局を行っています。

何やかやで、碁に費す時間は毎日三〜四時間ぐらいになりましたでしょうか。

碁の話を見せていただく前に、御了解を得たいことがあります。

まず聞いていただく対象として、有段の強い方々ではなく、級位の方、初心の方を想定してい

ることです。

次に私の話の内容が大へん主観的で、自己流であることをお許し願いたいと存じます。

これは私が弱いアマであるためです。碁はこうあるべきだとか、碁の強さの本質は何か、などという客観的な論説を述べる資格を欠いているからです。

## (2) 老後の趣味としての碁の魅力

私たち三高OBの大半は六〇歳の坂を越えました。趣味が生活の中に占めるウェイトが大きくなっていくのが、老後の特徴といえましょう。

読書と散歩が趣味という方がおられます。しかしある友人の説によれば、これは「趣味が何もない」ということの別の言い方だそうです。また、あまり上品な表現ではありませんが、飲む・打つ・買うのが最高の趣味という方もおられるかも知れません。しかし、この三楽は時として、健康や生活や家庭の平和などに大きい影響を及ぼす恐れがあります。同じ友人の言葉によれば、この三つは趣味ではなく「道楽」という別のカテゴリーに属するそうです。

以上の五種が趣味でないとしますと、後に残る大物の趣味としては、まずスポーツがあります。三高には多くのスポーツ部があり、そのOBの方々が数多くおられ、いまもおテニス、水泳、サッカー、野球などを楽しんでおられる方も少なくありません。

しかしスポーツは、鑑賞は別として、実践はだんだん年齢と共に困難の度を増していきます。そして困ったことに、実力や能力が年齢と共にかなり急速に低下していきます。

ゴルフは年を取っても若い人と一緒にやれるスポーツとして最も人気がありますが、それでも実力の低下は否めません。

その点、碁は有難いことに、何歳になっても若い時と同じようにプレーが可能ですし、実力が低下するということがありません。それどころか段位の方は別として、級や初心の方なら、六〇歳を過ぎてからでも、少なくとも初段までの上達が可能なのです。

このように、老年になっても殆んど若い時と同様に上達が期待出来る、これが碁の効用の第一です。

さらに碁を、他の一つの代表的な趣味、すなわち、いわゆる稽古ごとと対比して見ましよう。京都は茶道、華道、謡曲、日本舞踊などのメッカです。私は残念ながら何一つ、これが出来ないのですが、老妻は長唄と三味線に熱心で、そのレッスンを家の中でやられると、私も犬もその騒音公害に悩まされて、他の室へ避難ということになります。

老妻のお稽古を見ていますと、古来の日本の伝統芸能の特徴を、つい意地の悪い目で見るようになってしまいます。伝統芸能の本場の京都で、その悪口をいうことは、あちこち差し障りがあるのですが、私の偏見（本音？）としてお許し願います。

まず伝統芸能には必ず家元があり、プロとアマとが厳然と分れています。不思議なことに、アマは上達すればするほどカネがかかる仕組みになっています。プロは上達する程カネが入るのに、この世界では、お素人はこれらのプロを養うために、どれほど上達しても、いや、上達すればするほどカネがかかるようになっていきます。どうも納得し兼ねます。

それに較べますと、碁ほどカネのかからない趣味はありません。もちろんプロに指導して貰えば謝礼は当然ですし、段の免状を頂けば相応の免許料は必要です。しかしプロの指導は上達のための必要条件ではありませんし、また、免状がなくても初段の実力があれば、初段と称しても何の不都合もなく何処からもとがめられません。伝統の芸事では、カネを出して家元から許されない限り、地位、肩書を名乗ることが絶対許されないと極めて対照的です。

老年になりますと、一般論として次第に収入が減りますから、カネのかからないということは、老後の趣味の重要条件といわなければなりません。

さらにもう一つ、老妻のお稽古をつぶさに見ていますと、あれはプロの先生の芸のコピーとか思えません。一字一句、一節、一撥ごとにどうすれば、プロの先生の教えの通り真似できるかということがレッスンであり、勉強である、ということ。つまり素人は創造性を発揮するところが許されません。何百年という伝統が厳然と存在し、その厳しい枠の中で、家元とかその高弟の人達だけに僅かばかりの創造性と新規性が許されているに過ぎません。自由と創造をこよなく

愛する三高OBにふさわしい趣味とは思えないのですが。

老年の趣味として、もう一つの条件は、老若男女、誰とでも同一条件でやれるということだと思えます。年寄りばかりのゲームとして、例えばゲートボールがありますが、何となく老人的イメージが強すぎる様な気がして入っていきにくい気がします。

ゲームの世界で、男女が全く同一条件でプレーしているのは碁だけだと思います。三高会館のKP（級プレーヤー）会で、下は小学生からそのお母さん方、さらに三高OBの大先輩まで、嬉々として楽しんでおられるのは心暖まる風景です。

趣味やゲームには、いろいろな条件や要素がありますが、その一つとして無視出来ないものに社会的イメージがあります。例えば、ゲートボールとゴルフを較べるとゴルフの方が高級ゲームというのが通念です。パチンコファンには申訳ありませんが、パチンコが高級遊技と考えておられる方は少ないでしょう。その点では、有難いことに碁は昔から高級趣味という点で定評があります。話は飛びますが、今年（昭和六三年）秋、京都の十三の未公開の寺院の特別拝観が催され、その殆んど全部を見せて頂いたのですが、それらの寺院のいくつかに碁を打っている襖絵があることを知りました。中でも大徳寺塔頭の聚光院には、古い中国の君子の教養である琴棋書画を描いた狩野永徳の大きい襖絵があります。琴とは音楽を奏でること、棋とは碁を打つこと（将棋ではありません）で、読書、絵画と共に君子の最高の趣味とされていたわけです。その君子たちが

碁を打つ絵が、大きい襖の中央に描かれており感激しました。私の記憶では、日光東照宮の陽明門にも、やはり琴棋書画の左甚五郎の彫刻が見られます。つまり碁が昔から高級ゲームとして存在したことが、これらによって証明されていることを申したいのです。

趣味は見る趣味と自分が行なう趣味とに分類できます。プロ野球を、一杯やりながら寝ころんで楽しむというのは典型的な「見る趣味」です。演劇、映画の鑑賞がこれに属するのはもちろんです。多くの人たちがこの鑑賞型趣味人に属し、年齢が上るにつれて、趣味の比率はますますこのタイプに偏っていくのは当然でしょう。

しかし、鑑賞型プレーの趣味は、どうしても楽しさに限界があるように思います。

鑑賞も出来るし、自分も参加できる趣味、プレーによってだけ、最高の楽しさが得られると考えます。

碁敵と碁盤の上で黑白を争い、友人の打っている碁に助言して叱られ、テレビや新聞でプロの打碁を鑑賞できる。これこそ碁好き冥利に尽きるといえましょう。

老年の最大の恐怖の一つは老人ボケです。ボケるが悪いか良いかは、乱暴な言い方をすれば酒を飲んで酔払った方がよいか悪いかと同じで、人生観の問題という気もしますが、社会的通念に

従えば、いつまでもボケずに、最後の最後にコロツと極楽へ行けるのが人生の幸福ということになっていきます。

碁を趣味とする限り、ボケることはないようです。プロの碁打ちでボケた人はこれまで一人もいないといわれています。関西棋院の大御所である橋本宇太郎九段は八十歳をかなり過ぎて、いまなお、現役の碁打ちとして活躍しておられます。私が、かつて何度か指導して頂いた日本棋院の故林有太郎九段も八〇歳を過ぎてからも現役棋士として立派な成績を上げておられました。この先生は、数年前の正月の或る日、碁の手に勝たれて御帰宅、御機嫌でいつもより多めの晩酌の後、餅を喉に詰めて急逝されました。失礼な言い方を、人格高潔、寛大であられた林先生がお許し下さるならば、前記した条件にピタリの理想的な御最後かも知れません。

プロでなくても、アマの初段クラスで碁から離れない限り、ボケないこと疑いなしとされています。

碁ほど少ないルールから成り立っているゲームは他に無いでしょう。そしてその少ないルールを守る限り、それ以外、盤上どこに石を置こうと自由です。何の制約もありません。その代り、相手に勝つには、自分自身の思考能力と創造力が必要です。つまり、自分がどのような着手を選ぶと勝手な代りに、その良否はすぐに勝負として自分に跳ね返ってきます。



碁というゲームの本質はこの点にあるといえましょう。碁は面白く、楽しく、そして苦しく、限りなく奥の深いゲームです。このことを「碁打ちは親の死に目に会えない」という有名な諺で昔の人は表現しています。

碁の最後の、そして最大の効用は、碁を通じての交友です。老年になれば友人はどんどん減っていきます。現役を離れると年賀状の数が急に少なくなつて、年末年始の淋しさが身に沁みるといわれています。しかし碁に親しんでいる限り、何歳になつても交友はなかなか減りません。私の場合でも、東京の鞍馬会（三高の東京の碁のサークル）を離れて、かなり心細い気持ちで京都へ帰つて来ましたが、すぐに四明会（京都の三高の碁のサークル）に入会させて頂いて、友人がどつきりと増えました。嬉しい限りです。

碁を始めたのは三高へ入学した直後ですが、三高在学中も、その当時何人かおいでになつた碁を趣味とされる先生方、例えば森校長、英語の大浦先生、工学の八木先生、物理の国井先生などに碁と学問を教えて頂き、学問のことは綺麗サツパリ忘れてしまいましたが、碁を教えて頂いた記憶は未だに鮮明に残っています。

現在日本の各地に住む約五〇人の方と郵便で碁を対局していますが、これは五〇人のペン・フレンドを全国に持っているのと同じです。一〇年も碁の文通をしていながらまだ実際にお会いしたことのない方もおられます。これらの五〇人（女性数人を含めて）の碁友は、私にとってかけ

替えのない貴重な財産です。

### (3) 老碁の上達

三高で碁を教わるのと並行して、友人や先輩を通じて将棋、撞球、大学では麻雀、ダンスなどいろいろの趣味を覚えました。そして、それぞれに夢中になった時期があります。しかし何十年かを経てみると、残ったのは碁とわずかに将棋だけです。

なぜ他の趣味が脱落していったか、いろいろの事情がありますが、自分なりの結論としては、つきつめれば碁が一番面白いからということになります。例えば、麻雀は運八腕二といわれるように、運がゲームを殆んど支配します。一年も熱中すれば、誰でもその技倆が一定のレベルに達してしまい、後は運くらべということになります。

あるゲームが、どの程度、運に支配されるかどうかを測るメジャーとして、勝負に金を賭けるかどうかがあります。サイコロや花札は殆んど賭けます。ゴルフでもチョコレートなどを賭けるそうです。ところが、碁では極めて特殊な碁打ちを除いて、誰でも何も賭けないでゲームだけを純粹に楽しめます。

碁は勝負の九〇%がプレイヤーの技倆に支配され、それ以外の要素の影響力が極めて小さいゲームです。

プロは別として、上はトップアマから下は初心者まで、碁打ちは全員、強くなりたいという強烈な上昇願望を持っています。碁は技量の比率が九〇%であり、一局ごとに勝負があるため、自分や他人の実力には、はっきりと何段とか何級とかいうレッテルが貼られています。たださえ何事にも上昇志向の強烈な日本人が、趣味としての碁でも必死に地位（段級）の向上を願うのは当然であり、これがあるため、碁の楽しさが倍加されるわけです。

ある囲碁ライターは、碁打ちはその強さによって自分の住んでいる碁の世界が変わっていく、という表現をしています。その意味は、碁は強くなるほど碁に対する考え方、着手のヒラメキ方、他人の碁に対する理解力、鑑賞力が広く深くなっていく、という意味でしょう。もっと簡単に言えば、碁は強くなればなるほど、ますます碁が面白くなっていくということです。

つまり碁は強くなれば、優越感を味わえるというだけではなしに、強くなるのが楽しみを深めるための必要条件であることを御理解願いたいと思います。そしてそのためにこそ、初心や級位の方に、ぜひ早く初段にまで上達して下さいと、口を酔っぱくして申したいのです。

問題は初心や級位の、しかももう若くない方がどうすれば上達できるかということになります。碁というプレーは、面白くてたまらない反面、なかなか上達しにくい、また自分だけで主観的に上達したと思ひ込むわけにいかない、という厄介な難関が存在します。

本屋へ行きますと、碁の本は沢山並んでいます。殆んどがトッププロの執筆によるものです。知名度の低い碁打ちが書いても、その本が売れる訳がないので、これは当然でしょう。その中には「碁の上達法」かそれに近いタイトルの書籍もあります。また入門書も各種並べられています。しかし年を取ってから碁を覚えた級位の人達が、どのような方法でどのような手順で碁を勉強すれば、碁が間違ひなく強くなれるかということが、マニュアルとして、あるいはシステムとして記載されている本にはこれまでお目にかかったことがありません。

本でなく、プロの先生に実地指導を受けても同じです。先生は打った碁を並べ直して、下手のこの手が悪かった、こういう考え方を改めなさいとか、教えて下さいますが、どうすれば初段になれるか、その方法を明解に教えて下さる先生はいらっしゃいません。

だいたい、プロのトップの先生には、六十歳以上の級位者の心理や願望が理解されるはずがないと私は思っています。プロのトップは、生れついで碁の天才で、子供の時からプロとしての厳しい訓練を受け、小学校を卒業する頃には、アマの最高レベルぐらいの強さを身につけた人たちです。碁を打つという一つの共通点を除けば、晩年の級位の碁好きとは別世界の方々です。この方々に級位者の上達法を教えて頂くと思うことが無理でしょう。

欧米では専門家でなければ理解できないハイレベルの分野を、素人に分るように解説することを職業とするライターが少なくありません。例えば難かしいハイテクや医学などの専門の最先端

の分野を、誰にでも分り易く解説する科学ジャーナリストが、専門家に劣らぬ社会的地位や評価を得て活躍しています。

碁の世界でも、新聞の囲碁欄の記者や囲碁雑誌のライターを中心に、囲碁ジャーナリストと呼ばれる人達があり、中には有名な方もおられますが、しかし碁の世界の中で、その地位が高いとはいえません。また、その人達の記事または著作の内容は、プロの打ち碁の解説、甚に關する隨筆に限られているといっても過言ではないでしょう。

要するに、若くない初心者、級位者に対する碁の上達法はシステム化されないまま何百年も過ぎてきているということです。不思議なことだと思えます。

先に、私は華道、茶道などの家元制の稽古ごとについて、批判的なことを申しましたが、初心者に対する上達の指導は、さすがに見事にシステム化されています。プロのどの先生に入門しても、殆んど変りのない手順とプロセスで、懇切丁寧な教授がなされます。流星というほかありません。

初段になるための老碁の上達法というテーマが気になりだしたのは最近のことです。三高時代に碁を覚えてから約五〇年、その間、自分が強くなりたい、自分が碁を楽しみたいということばかり考えて年月を送ってきました。

ところが三年ほど前に、ふと、郵便碁で級位の人たちと打ってみよう、何とかして級位の会員の人達の上達の役に立ってみようと思いつきました。郵便碁の会員は約一、〇〇〇人ですが、級位者は五〇人という少数派です。郵便碁会の会報に対局希望の意向を載せましたら、級位の人の約半数の二五人から申込みがあり、驚きました。そしてその全部が四〇歳以上です。

郵便碁はワンラウンドに二年近くかかります。ちょうどそのころ、京都へ東京から転居して来て、三高会館で級位者だけのKP会が毎月開催されていることを知り、その方々との対局に加えていただくことになりました。

この二つの体験を通じて、直接に級位の方たちの希望、上昇志向、段位者への遠慮、上達がなかなか思うようにならないことへの焦慮、あきらめ等を身に泌みて体験するようになって約二年たちました。

そしてこの二年の間に級位の方の上達法という問題への関心が、だんだん私の心の中で強くなるにしたがって、これまで多くのプロの先生やアマの強豪の方々が、それぞれバラバラに挙げておられる上達法を数え上げてみました。

プロの打碁を出来るだけ数多く盤に並べること、詰碁を勉強すること、実戦で鍛えること、自分より二―三子強い相手と打つこと、プロの指導を受けて打碁の手直しをしてもらうこと、自分の打碁の棋譜をとり、強い第三者に批評してもらうこと、詰碁に挑戦すること、定石、布石、戦

い、寄せなどを本や雑誌で広く勉強すること、囲碁ゼミナーに参加すること等々、いろいろの方法が挙げられております。たしかに、これらの一つずつがそれぞれ有効なことは疑いありません。しかしあまりにもそれらの方法は多種多様です。一体どの方法が、級位のだれにでも有効な方法なのでしょう。どの方法を選べばよいのでしょうか、ただ迷うばかりです。

級位の年輩の方と碁を通じてお付き合いしているうちに気が付いたことがあります。男性も女性も、中年以上になってから碁の勉強を始めた人達で、しかも大へん知的な方が多いことです。インテリといわれるこのような方々には一つの共通点があります。それは碁を知的ゲームとして受け止め、したがって碁の上達の近道は、碁の技術に関する各種の知識をできるだけ大量に理解し吸収しようと懸命に努力されていることです。

現在は碁の世界も他の世界と同じように情報洪水の時代です。碁の雑誌、テレビ、ビデオ、碁の新聞、通信教育など溢れるような碁の情報が氾濫し、いつでも随意に、しかも安価に、入手することが可能です。また、各種の碁会や碁の教室へ入門してレッスンを実地に受けることも、以前にくらべると遙かに容易になっています。

中年から碁を始めた方々は、このようなメディアを通じて、出来るだけ大量の情報を出来るだけ短期間に吸収しようと努力されています。

どのような方法であろうと、上達にとって情報の獲得、吸収が無駄であるはずはなく、それが

有益なことには違いありません。ただ問題は、果して上達法としてこれらの方法の効果が格段に効果的かどうかです。

結論を申しますと、その効果について多大の疑問があります。理由の第一は、殆んどの方々が碁を頭で覚えようとしておられること、言い換えますと、「意識」の中に碁の知識を大量に収納し、それによって急速な上達を図ろうとしておられることです。

若い人と違って、老人の特徴は覚えることと同じぐらい忘れるのが激しいことです。特に、古いことはよく覚えているのに新しいことはすぐに忘れがちです。右の目や耳から入った新しい情報は頭脳を速かに通過して左の目や耳から抜けていくのを否定できません。

理由の第二は、氾濫している碁の知識には、難しいもの、易しいもの、高級過ぎるもの、是非必要なものが混在していて、果してそのうち、何が級位者が初段になるために、必要で十分な情報が明らかでないことです。級位の方にとって、有害ではなくても無益な情報や知識があまりにも多過ぎます。

以上の理由から、私なりに次のような上達法が有効という結論に到達しました。私の考案による上達法では権威がありませんが、まあ欺されたつもりで実行なさって下さい。必ず効果があると信じます。



要点は「やさしい知識だけ」を、うろ覚えでなく、正確に自分の「潜在意識にたたきこむ」ことです。別の言葉でいえば、頭で覚えるのではなく、体で覚えるのです。実戦で初段の実力を発揮できるには、対局の時に「やさしくて正確な着想が頭に自然に浮かぶ」ことが必要なのです。碁の強さの大半は「ひらめき」です。潜在意識に収納されていて、もはや忘れることのない、正確で易しい着想が、実戦で自然に湧きでるようになればしめたものです。

皆さんの持つておられる本や雑誌の中から、定石、布石、中盤戦術、寄せ、詰碁、何でも構いません。やさしいものだけを選び出して下さい。選び出した本や記事を必ず「三〇回繰返して」読んで下さい。繰返し三〇回が要点です。三〇回読むという方法は、昔の陸軍の有名な参謀であった人が、軍事の勉強や訓練には二五回の繰返しが有効で必要と書いているのにヒントを得たものです。とにかく繰返して下さい。無心にただ繰返して下さい。スポーツや伝統的芸能の上達法も、繰返しを基本としています。碁の勉強にこれらの繰返し訓練法を取り込まない方法はありません。

つぎに大切なことは、自分は必ず初段になるという信念をもつことです。年を取ってから習い始めたのだから、到底初段は無理だという謙虚な方が多くいらっしゃいます。しかし初段になることが、老碁を本当に楽しむための基本条件の一つであることを思い出して頂いて、決して初段への希望をお捨てにならないで下さい。「毎年少なくとも二―三級ずつ強くなって近い将来に初

段」という確信を持つのが大切です。

毎晩寝る前に「私は初段だ」と三〇回唱えて下さい。「初段になれる」は駄目です。一日も休まず毎晩必ず繰返します。実戦は楽しみであると同時に勉強の場でもあります。楽しみながらつぎのような心得で対局しましょう。

○上手とも下手とも、だれとでも打つ。

○目先の勝敗に一喜一憂せず、上達を目標として打つ。

○積極的、攻撃的な心構えで打つ。

○上手な、しゃれた着手を打とうとせず、単純明快な着手を心がける。

○自分の短所を直そうとせず、自分の長所を伸ばすよう努力する。

○勝っても負けても、その楽しさと悔しさを、表には出さず、上達のための心のバネとして活かす。

#### (4) 碁の楽しさのいろいろ

テレビのスポーツ放送は、スポーツファンにとって欠かせない娯楽番組です。野球を筆頭にゴルフ、相撲、テニス、サッカー、ラグビー、バレーなど放送のない日はありません。これらのスポーツ放送と並行して、碁も将棋と共に、時間、回数は多くありませんが、NHK等で放送が行

なわれ、囲碁フアンの楽しみの一つとなっています。

一見、同じように思えるテレビのスポーツ放送と、碁の放送とは大きい差があります。

テレビの画面はいうまでもなく、四角い平面です。スポーツという三次元の世界でのプレーが、二次元に変換されて写されているわけです。テレビでのスポーツ観戦は臨場感が乏しいといわれる所以です。近く脚光を浴びるといわれるハイビジョン・テレビでも、画面の密度と広さが改善されるだけで、このギャップが本質的に変わるわけではありません。

一方、碁は碁盤という四角い二次元の平面の上で、プレーが行なわれます。テレビの放送は、それをそのまま同じように四角い二次元のテレビ画面に再現するわけです。テレビの碁の画面は、プレーの画面そのものです。

テレビでの碁の鑑賞が、スポーツのテレビ鑑賞に較べて一〇倍面白いといったらスポーツファンに叱られるでしょうか。

四角いディスプレイ画面があれば碁の鑑賞、プレー、勉強がそのまま画面の上に再現されるというメリットを生かすための種々の試みが、コンピュータという新しい媒体を通じて行なわれ、実用化の緒についています。これを仮りにハイテク碁と呼称します。

ハイテク碁は三種に分けられます。最も実戦的なのは、離れた場所にいる二人が電話回線を利用して対局するシステムです。それぞれの対局者は専用のパソコンまたはファミコンを所有し、

それを操作することによって、ディスプレイ画面に碁盤を再現し、同一場所で対局するのと全く同じプレーを、離れ離れの状態で実施することができます。

第二のハイテク碁は、人間とコンピュータとのプレーです。いろいろのソフトが開発されていますが、コンピュータの棋力は、七〜八級といわれています。今後この棋力は急速に上達するでしょう。

第三は、主として鑑賞用、勉強用のものです。フロッピー・ディスクなどに記憶させた古今の名局、プロの講義、その他を各種のディスプレイ画面、特殊の碁盤の盤面上などに再現させます。このようなハイテク碁は今後著しく進歩し普及するに違いありません。そして私達がさらに年を取って行動力が減退し、自宅に閉じこもるような状態になった段階を御想像下さい。その段階で、このハイテク碁、特に第一の電話回線を使うコンピュータ対局と先に申しました郵便による対局は、碁の対局を死ぬ直前まで可能にしてくれる貴重なメディアと信じます。私の碁友のWという方は三年前七五歳で病床で寝たきりになってから、この二つの方法によって七八歳の現在も毎日碁を楽しんでおられ、私もお相手をさせて頂いています。

碁は究極の趣味という言葉があります。名言と 생각합니다。楽しみ、勉強し、上達し、そして初段になり、碁を終生の友として、輝かしい晩年を謳歌致しましょう。

## 鞍馬の天狗たち

三木一郎(当時ユニチカ常務)

旧制三高では毎年五月一日に記念祭があつて、催しとして仮装行列が行われた。ある年、私たちのクラスでは中国の故事からとつた「竹林の七賢」をやることになつた。派手な外題が多い中で、静かなムードがかえつて注目をひいたのか、満場のかっさいを浴び、一等になつてしまつた。

これに因んで昭和九年卒業後も私たちのクラス会を「清談会」と名づけ、毎年東京・京都・名古屋などで会合を持っているが、現在まですでに三十年以上続いている。戦争などで亡くなつているので今残っているのが約二十五人、毎回の会合にはそのうち半数くらいが参加している。戦後の文壇の奇才、故織田作之助君もメンバーの一人であつた。

ところでこの「清談会」にはたまたま基天狗(てんぐ)が多く、懐旧を述し、よもやま話に花を咲かせたあと、いつの間にか「それでは一局」ということになるのが常である。安田章一郎(名古屋大学教授・六段)、大江兵馬(岡山地検検事正・四段)の諸君が手強い打ち手であるが、久保田義磨(国会図書館長)、小佐田忠男(名古屋繊維取引所専務理事)、中西

泰男（日本証券業協会専務理事）、正井保之（北海道糖業専務）、向井元（塩野義製菓常務）、四方陽之助（労働省保険審議会委員）の諸君もみな有段の天狗仲間で「にくさもにくしなつかしき」面々と一年の研鑽（けんさん）の成果を試し合うことは何よりの楽しみである。

碁と言えば三高OBの碁の会があつて、東京の会を「鞍馬会」、京阪神の会を「四明会」という。「鞍馬会」の総帥は有光次郎さん（日本棋院理事長）、「四明会」の総帥は谷口豊三郎さん（東洋紡会長）である。「四明会」には吉川大二郎（弁護士）、直木富三郎（日立造船監査役）等アマ碁会最高段の諸氏もおられるが、これら鞍馬の大天狗が集まる会合では碁を通じて諸先輩から感化を受けることが実に多い。

一方女流アマ日本一の糸井（旧姓桑村）庚代子さん、京大囲碁主将の田保栄三君等の若とときどき碁盤を囲むのもまた違った楽しみである。

私は碁もまた清談であると思う。碁の静かできびしい戦いの中に、相課の人格や語らいが自然と伝わってくる。私は碁という無言の清談を通じて人と人とのつながりを深め広げさせてもらっていることの果報に感謝したい。